陳舜臣さんを語る会通信

NO.1 Mar. 2020 発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34 橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」 Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員 発行日 2020年3月1日

「陳舜臣さんを語る会通信」の創刊号です。「通信」では、陳舜臣さんと陳舜臣作品に関すること及びその周 辺を広く取り上げるつもりです。「周辺」については、編集委員の私事にかかわることも多々あるかと思いま すがご容赦ねがいます。ところで、「語る会」も「通信」も、全く、個人的なものとしてスタートいたします。 趣旨にご賛同いただける方はお申し出ください。

まずは、第1号をお読み下さい。

(編集委員 橘 雄三)

「陳舜臣さん 台湾・大陸 旅の記録」

陳舜臣さん(1924-2015)は、原籍は台湾台北、父の代に日本へ移住、神戸出生です。日本を起点にして、 陳さんの渡航歴が増え出すのは、1972年の日中国交回復以降で、ざっと数えて70回を超えるでしょう。そし て、それは、陳さんの人生と密着していますので、「台湾・大陸 旅の記録」(編集委員作成)を創刊号に 取り上げることは、意味のあることと考えます。

また、旅の記録だけでなく、戦後、1946~49年、初級中学英語教師としての台湾滞在や作家としての大き な賞、江戸川乱歩賞、及び直木賞の受賞、その他、国際政治の出来事も付け加えました。

参考図書は、『青雲の軸』、『道半ば』、『陳舜臣中国ライブラリー30年譜』(集英社)ほかです。

■『青雲の軸』1974年7月発行、旺文社文庫

号から、71年3月号まで連載。「続青 雲の軸」を同誌、71年10月号から、72 年3月号まで連載。

「一時は『題下手』作家の定評を得た ほどだ」「『青雲の軸』というのはわ るくない」(『青雲の軸』序章より)



主人公は陳俊仁。玉音放送で終わっている。人生を 「青雲の軸」を受験雑誌「蛍雪時代」の1970年10月 模索する孤独な魂の遍歴。自伝的青春小説。

> ■『道半ば』2003年9月発行 集英社「陳舜臣中国ライブラリー」 (1999-01年発行) 全30巻の月報に連 載した「道半ば」が中心。 自伝エッセイ。



青地は人生の転機

1924 2月18日、	神戸市元町通7丁目で生まれる
-------------	----------------

「小学校にあがる前に、私は二度か三度台湾に帰省したようである」

「台湾人是這的款」の話(「辛うじて二本の脚で立てるような年齢になっていた」) が学

る校 土地(台湾新荘)の人が竹細工用に加工作業中の孟宗竹で、左足の甲をけがした話

前に 台湾に帰省し、日本語を忘れ、思い出す作戦に「馬方のおっさん」を利用した話

1932 4月、祖父死去。小学三年生になる前の春休み、祖父の法事で台湾へ帰る

1937 中学2年の夏休み、父をのぞく一家で台湾の新荘へほぼ一か月の帰省

1945 8月15日、終戦

あ小

「否応なく国籍を変更されたので、これまで自分に予定されていたコースが取りにくくなったのであ る。大阪外語は国立だから、そこの教授、助教授は国家公務員という一面がある。」(『道半ば』)

1946 2月末、呉港から帰国船に乗る。3月初旬、基隆に上陸。弟・本臣が養子に入った本家(父の従弟の家) に身を寄せる。新設、台北県立新荘初級中学の英語の先生にと懇願され、1949年の帰国時まで勤める

1947 民衆による反国民党暴動、二・二八事件起きる

1949 10月、日本に帰る

12月、国民党政府、首都を南京から台北に移す

「陳舜臣さん 台湾・大陸 旅の記録(続)」※西暦年欄の青地は人生の転機を表す

1950 1950年3月26日結婚。民間貿易が再開され、家業に本格的に取り組むようになる

1958 父の会社での仕事はもっぱら商用文を漢文で書くことで、いわゆる営業活動ではなかった

余暇は読書、翻訳、歴史研究に費やす

- 1959 娘を寝かしつける際、推理小説を読んで聞かせ、「この程度のものならボクにも書けるな」と夫人に言うと、「なら書いてみなさい」と言われ、作家になる決意を固める
- 1961 1961年8月、「枯草の根」で第七回江戸川乱歩賞を受賞。1962年以降、『三色の家』ほか、予想以上に ~ 多くの原稿依頼が舞い込む。1967年、『阿片戦争』を書き下ろす
- 1969 1969年1月、「青玉獅子香炉」で第六十回直木賞を受賞

この頃はまだ台湾では国民党政府による出版物の検閲が厳しく、台湾派ではなく本土派と目されていた 氏の作品は持ち込めなかった。だが、「青玉獅子香炉」は新聞に連載された。内容に不快な思いをした という故宮博物院関係者から抗議の文が寄せられたりした

1972 9月29日、日中共同声明(日中国交回復)

10月6日、初めての中国旅行。身分は日本赤十字社に証明してもらって行く。香港、深圳、広州、長沙、南京、北京、西安(半坡博物館)

- 1973 8月~9月、家族4人。日中間の空路はまだ開かれていなかったので、香港から入る。西安、蘭州、ウルムチ、トルファン、ベゼクリフ、酒泉。この旅を機に、中華人民共和国籍取得。以後、台湾に入れなくなる。「(黄河や揚子江を連想し)まだ見ぬあこがれの祖国の山河」(『青雲の軸』)
- 1974 9月。香港から深圳、北京、大連、陽泉、延安、西安、乾陵、鄭州、南京、蘇州(虎丘)、揚州、杭州(銭塘江)、上海へ
- 1975 8月、家族4人。北京、西安、酒泉から車で敦煌へ。蘭州(甘粛省博物館)、嘉峪関、劉家峡。
- |1977||7月。ウルムチ、コルラ、クチャ、カシュガルから車でホータン。「シルクロードの旅」取材
- 1978 夏。南昌市から景徳鎮へ(江西省)。「中国やきもの紀行景徳鎮」取材
- 1979 3月。「太平天国」の取材。北京、長沙、桂林、南寧、桂平、広州
 - 9月。NHK「シルクロード」取材で西安へ
 - 10月。「天竺への道」取材。トルファン、クチャ、キジル、大龍池、カシュガル、パミール、タシュク ルガンなど
- 1980 4月。香港、廈門、福州(崇安)、武夷山、南平、上海、鎮江、揚州(鑑真和上像里帰り)、南京、成都、楽山、峨眉山、洛陽、龍門、徐州、曲阜。5月泰山へ
 - 8月下旬。NHK「シルクロード」取材・録画。北京、ウルムチ、トルファン、高昌故城、ベゼクリフ、交河故城
- 1981 9月末~10月。北京、ウルムチ、南山、イーニン、カシュガル(クルバーン祭)
- 1984 4月。福建の旅(司馬遼太郎氏らと)。北京、徳州、泉州、廈門、西安へ。「中国発掘物語」取材

8月。敦煌へ

- ◆前ページ、戦後、陳舜臣さんが台北県立新荘初級中学英語教師としての台湾滞在中の1947年、二・二八事件が勃発します。この事件は侯孝賢監督の『悲情城市』の背景として描かれ、日本でもよく知られています。
- 二・二八事件について、陳さんは「ただ銃声を聞いていたというのは口惜しいことであった。その音とともに、同胞の命が一つまた一つと消えていくことを、そのとき実感できなかったことにたいして、私はいまでも罪悪感をもっている。そのとき、おまえはどんな気持ちでその音をきいていたのか、と問

われると、一祈りをこめてきいていた。と、答えるしかなかっただろう」(『道半ば』)と記しています。 ◆1972年、日中が国交を回復し、陳さんは、待ってましたとばかり中国旅行を開始し、翌73年には中華 人民共和国籍を取得します。

陳さんは『青雲の軸』で、1938年7月の神戸大水害を目の当たりにした主人公俊仁、及びその心の動きを「俊仁はあたりを見まわした。彼はこのとき、目の前の濁流から、ふと黄河や揚子江を連想した。(こんな色だろうか?)まだ見ぬあこがれの祖国の山河」と記述しています。

「陳舜臣さん 台湾・大陸 旅の記録(続々)」※西暦年欄の青地は人生の転機を表す

「除煙でん」口停・八座「爪び記録(腕々)」	※四暦年欄の青地は人生の転機を表す	
1985 10月。林則徐生誕二百年記念シンポジュウム。福州、廈門、上海 ら帰国	、寧波、舟山列島の普陀山へ。北京か	
1986 10月~11月。上海、浙江の取材。紹興(秋瑾故居)		
1987 4月。「茶事遍路」取材。黄帝陵を参拝。成都、昆明、西双版納倒 景洪県へ	泰 (シーサンパンナタイ) 族自治州・	
8月。北京、承徳、旅順、大連、天津など		
12月。上海、福州、泉州、安渓、廈門など	7 5 7	
1988 1月、蒋経国総統死去。副総統李登輝が総統に		
9月。峨眉山へ	The Contract of the Contract o	
1989 6月4日、天安門事件		
1990 3月、李登輝、総統選挙で選出される	Line that the property of the land	
10月、日本国籍取得		
12月4日。台湾へ。41年ぶり	70 (1010 7 11 7 7 7 8 7	
1991 11月。台湾へ。台北、高雄、花蓮、台東など		
1992 9月。「日中文化・経済」シンポジュウムで大連へ。「耶律楚材」の取材で北京		
1993 前年暮れ12月31日、沖縄。1月1日、台湾へ		
4月。神戸、那覇、台湾・基隆へ(豪華客船「飛鳥」の旅)		
5月。「耶律楚材」取材。北京、玉泉山へ		
9月。台北へ。「中華飲食文化」シンポジュウム。同市に「舜臣図書室」オープン		
1994 7月。台湾へ		
8月10日。宝塚歌劇80周年記念行事の講演中に舞台で倒れ(脳内出血)入院		
1995 1月13日、5ヶ月の闘病をおえ退院。4日後の17日、大震災		
10月。台湾へ		
1996 4月。中国へ。敦煌にも		
9月。台湾へ		
1997 3月。北京、杭州、広州、香港(テレビ朝日の取材)	より (2 2 0 0 0	
10月~11月。台北、香港へ	4 W	
1998 5月。上海、台北	年 か 11 り	
1999 7月。「桃源郷」取材。中国・雲南省へ	月の地	
2000 3月。台北。結婚五十年を祝う会	地 神 を 戸 訪	
2002 2月。沖縄(全日空シンポ、PHP取材)、台湾、博多(NHK取材)	5 h	
2003 1月。台北へ	 のがたり <u>。</u>	
3月。香港、台北、台南へ	<u>5</u> ~	

◆前ページ、1972年の中国旅行のとき、陳さんは北 京で、「1950年代に祖国建設の情熱に燃えて中国に 渡り、北京放送で放送記者をしていた妹の妙齢」 (『陳舜臣中国ライブラリー30 年譜』)に会っていま す。陳家は、"わからないくらい昔"、福建省泉州 から台湾に移住したといいます。それなのにどうし て、陳さんそして妹さんの心にある祖国は、台湾で はなく大陸だったのでしょうか。

◆それからもう一つ、1972、73、74、75年と毎年北 京へ行っています。ところで、エッセーなど、文化 **大革命**について書いた陳さんの作品を私(橘)は、 寡聞にして、知りません。

◆台湾では、1988年に蒋経国総統が死去し、**李登輝** 総統の時代となります。逆に、大陸では1989年天安 門事件が起こります。このような政治状況の変化が 陳さんの日本国籍取得に影響したと思われます。

2003年 孫文が取り持った

陳舜臣×玉岡かおる 両氏の対談

於:移情閣 (孫文記念館)



移情閣3階での対談 後ろは孫文胸像

5年前の2015年1月21日、作家 の陳舜臣さんがお亡くなりになり ました。二日後、玉岡かおるさん の追悼文、「陳舜臣さんを悼む」 が新聞に載り、非常に興味深く読 みました。その理由は、玉岡さん が文中、「若輩の私が同じ神戸の 作家というご縁で陳先生と対談で きる幸運に恵まれた時はうれしかっ

た。2003年のことだから、10年以 上も前のことになる。場所も印象 的だった。神戸市垂水区にある移 情閣…」と記されていたからです。 両氏の対談当時、私(橘) は職員 として、移情閣に勤務していまし た。以下、この対談及び追悼文に ついて記述します。

(編集委員 橘雄三)

《1. 孫文が取り持った縁》

玉岡かおるさんは追悼文中、 も印象的だった。神戸市垂水区にある 移情閣。陳先生が『青山一髪』で描か れた孫文ゆかりの場所である。そして 私も、『天涯の船』で同じ孫文を描こ うとしていた」と記されています。ま さに、孫文が取り持った縁と言えます。

《2. 対談の場所設営に私も一役》

当時、私は財団法人孫中山記念会の 職員として孫文記念館(移情閣)に勤め ていました。陳舜臣、玉岡かおる両氏 を案内し、応接室で、ほんの少し話を したことを覚えています。私は陳氏を 心の中ではいつも、「陳舜臣さん」と 「さん」付で呼んでいます。氏の中国 物は、私の青春時代から中年にかけて、

「人生の手引書」でした。『中国歴史 の旅』や『太平天国』などをガイドに、 中国各地をよく旅行しました。そのお 礼を言ったように記憶しています。

この日、両氏の対談は移情閣3階の 孫文胸像前で行われました。詳しくは、 「ネットミュージアム兵庫文学館 陳 舜臣館」をご覧ください。この対談は 同文学館の企画です。

《3."陳舜臣" サイン3文字の重さ

追悼文で感動を受けたのは、玉岡かおるさんが陳 舜臣さんに、サインを求める件(くだり)です。新 聞記事原文でお読みください。

学生のころ、父の書棚か

からのアイデンティティー 一方の国を愛する姿勢が、

人として育ちながら、 戦前の神戸で生まれ、

かれた孫文ゆかりの場所で 陳先生が「青山一髪」で描 戸市垂水区にある移情閣。 年以上も前のことになる。 003年のことだから、10 れた時はうれしかった。2 戸の作家というご縁で陳先 ある。そして私も、 生と対談できる幸運に恵ま 日中談議がなごやかに進

った。病気をしてから手がれていた奥様がおっしゃ のまま、 た。何か失礼なことをしで ところが陳先生は、笑顔 思案してしまわれ サインをお

書いたから、今日書けるの けるのは400字。陳舜臣、 はあと397文字だ」 あなたのために

そのようにして命を吹き込 の中で永遠を生きることの まれた陳作品が、

不来にかかわる歴史の生き ら日本、中国と日本という、 人を喪った事実であるの だろう。

エキサイティングに接した 授業では学べない中国と 確実に私を"歴女" えらいねえ」

かしかった。 いるのだから、 たが、そう言うご自分は

かにペンを執られた。 数分の思案の後に、にこや 若さゆえ健康ゆえのおごり そんなことも知らなくて すると先生は、

ら、生身の肉体を小説に捧りある命を生きる人間なが作家の魂の集積。自身は限 うまでもない。今はただ、 ぎこむ宿命の者であると、 を込められていたことは 震える3文字が、

歴史小説を書くなんて

玉岡かおる



著作権の関係で新聞記事の 写真に換え、 「陳舜臣さん を語る会」所有の写真を使 用しました。2003年撮影

なお、上掲2015年1月23日付中国新聞記事「陳舜 臣さんを悼む」の使用について、執筆者玉岡かおる 氏、配信元の共同通信社、掲載紙の中国新聞社、そ れぞれの許諾を得ております。

舜 臣 孫文記念館副館丘、後ろは王柏 柏 長